

いま目の前にある「作品」は果たして真作なのだろうか。そもそも真/贋の区別はあるのか。いや、それどころか、「これは芸術作品だ」と言ってしまうてよいのだろうか。

「異空間同時展示」という試みそのものが、ある種の〈芸術〉である——こう言ってしまうことはたやすく、そしてひどく陳腐だ。A・ダントーのいう「芸術の終焉」が訪れて実に半世紀が経ち、〈芸術〉というものはますます大衆の生活に、娯楽に溶けこみ、お手軽なものとなった。もはや「Aは〈芸術〉だ」と、ただそう言ってしまうだけでは、ほとんどそれ自体に積極的な価値を見いだせない時代をわれわれは生きているのだ。それゆえに、われわれは「異空間同時展示」を単なる〈芸術〉としての消費からすくい取らなければならない。

映画という芸術形態が大衆娯楽として壮年期を迎えつつあった1936年、W・ベンヤミンが評論「複製技術時代の芸術」で「アウラの喪失」を肯定的に論じたことは、芸術に関心のあるほとんど誰もが知っているだろう。写真や映画といった機械的複製は、いま・ここにしかないという作品の一回性を否定し、受け手はそれが複製されたものであることを前提に、安価で、そして気軽に享受する。

だから極端な例を挙げれば、劇場の観客は「いまここで観ている映画のフィルムが実はオリジナルである」という可能性を考えもしないし、たとえそうだと、それを理由に通常よりも高い入場料を要求されることに納得しないだろう。少なくとも鑑賞体験として、オリジナルのフィルムによる上映とコピーされたフィルムによる上映は、識別不可能で、それゆえにまったく等価だ。

そして、このように「芸術の終焉」ないしテクノロジーの発展によって、アウラが減退なり喪失されつつある現代において、Chilling Sunはある意味での「アウラの回復」を試みている。彼らにそのような意図があるかは別として、高度に成熟し大衆化した社会において、芸術の、アウラの再分配を試みる彼らの活動は、社会主義的とさえ評価できよう。「操作」という言葉選びに過激な左翼的ニュアンスを嗅ぎつけることさえできるほどだ。

しかし私がここであえて問いたいのは、「異空間同時展示」の機能が本当に「アウラの操作」「アウラの分配」にとどまるものなのかということだ。私としては、少なくとも今回の彼らの試みは、それとは少し別のところに漂着していたように思える。

さて、冒頭の「いま目の前にある「作品」は果たして真作なのだろうか」という問いに対して、われわれは回答する術をもはや持っていない。梱包という過程を経ることによって——本来は量子力学の思考実験として発明されたにもかかわらず、今となっては表面上の意味だけが一人歩きしてしまっているこの概念をあまり安易に持ち出したくはないが——永久に「シュレディンガーの猫」のままなのだ。そしておそらく彼らはこの理論を「アウラの操作」の根拠としているのだろう。

しかしながら、実際のわれわれの鑑賞体験はより複雑なものであったに違いない。われわれは確かに「1/30の確率でオリジナルを鑑賞している」という確率的事実を知っていた。ただ、だからと言って、「まさかオリジナルなわけがない」という冷笑的な気分と、「もしオリジナルならすごい」という期待との間で揺れ動いていた、かというところでもない。むしろそのような揺れ動きの態度は、「これがオリジナルかどうかなんてどうでもよい」という達観の態度と拮抗していた。いまここにある作品それ自体の鑑賞を半ば諦め、状況それ自体を楽しんでいた。これは、先ほど映画を例に挙げたように、単にオリジナルである可能性をまったく考えもしないという事態とは異なる。あえてポップな表現をすれば、「一周回って気にしない」ということだろう。

この個人的鑑賞体験から言えることは2つある。まず1つは、今回の「アウラの操作」というChilling Sunの目的は、なんらかの心理的ノイズによって完全には達成されていなかったかもしれない、ということだ。しかしこの失敗は、同時にまったく別の可能性を示唆する。つまり、「異空間同時展示」という企画が、「アウラの操作」を実現するための機能を備えたシステムであるというよりも、それ自体が、まったく別の新しい、奇妙で形容しがたい鑑賞体験を生む装置であるという可能性だ。だから私は、早々に退けた「陳腐」な評価を部分的に採用し、「異空間同時展示」はそれそのものがある種のメタ芸術であると評価したい。

そしてこの「奇妙で形容しがたい鑑賞体験」は、われわれに単数芸術/複数芸術というものの本質の、その輪郭を突きつける。われわれは「異空間同時展示」において、単数芸術としての鑑賞、さらにはアウラを期待する鑑賞態度と、複数芸術としての鑑賞、さらにはアウラを自ら放棄する鑑賞態度の間で絶えず振動していた。この振動はまさに、芸術作品というものを単数芸術/複数芸術という単純な二分法に落とし込むことはできないということをわれわれに突きつけると同時に、単数芸術・複数芸術という両端の概念のあいだを満たす、膨大な芸術の可能性をほのめかす。

「異空間同時展示」とは、そういう、芸術の多次元的な広がりを見つめるための「窓」なのだ。